

共感論からダーウインを読む

仲島 陽 一

はじめに

ダーウイン (Charles Darwin, 1809-1882) は言うまでもなくイギリスの大生物学者である。その最大の功績は進化論の確立である¹⁾と私は考えている。ここでは彼の著作のうち三つ、『種の起原』『人間の由来』『人および動物の表情』をとりあげ、共感の問題から考察する。

一 『種の起原』(1859)

本節では、この著作の内容上の検討はできる限り避ける。主として検討されるのは、用語と論理の問題である。

まず、この著作の主題は、「進化論」でなく「ダーウィニズム」である。この二つの語はダーウイン自身が用いたものではない。また現在の専門家が厳密に同じ意味で使っているものではない。私は「進化論」を、「生物の諸々の種がそれぞれ別個に現れたのではなく、少数のあるいはただ一つの種から分かれて現れたのだという学説」と定義し、「ダーウィニズム」を、「進化の原因や仕組みについてのダーウインの学説」と定義する。これらは特に独自のものではなく、大部分の研究者が少なくともおおまかには同意するものと考えてるので、ここでその正当化はしない。しかしこの区別は重要である。なぜなら進化論は、今日では、科学においては正しいと専門家の一致がある²⁾が、ダーウィニズムに関しては、その本質や妥当性をどう考えるか、学説上の不一致や対立があるからである。そしてこの著作では、進化論が正しいとなぜ言えるのか、という問題以上に、進化はなぜまたどのように行われるのか、という問題に多くの頁が当てられている。なぜであろうか。一つは、この後者の問題が未解明であり、少なくとも今までの学説(ラマルクのものや、祖父エラズマズのものなど)に彼が満足できなかったので、それ自体解明を求めていると考えたからであろう。しかしもう一つとして、学説としては以前からある進化論に賛成が少なかった要因としてこの問題の未解明をみたこと、つまり進化の要因や仕組みについて説得的な理論を提供することで進化論の正しさという問題にも寄与する、とも考えたからではなかろうか。そうであるとする、このことは論理的に十全ではなく³⁾、歴史的にも問題を残したが、心理的には了解できる。

「ダーウィニズム」を上記のように「進化の要因や仕組みについてのダーウインの学説」と形式

的な定義をすればほとんど異論はあるまいが、その内容の規定は少し論議を呼ぶことになる。私としては（比較的一般的と思うが）それを「生存闘争」と「自然選択」による進化論と規定することにする。ダーウィン自身は「自然選択」の語によってダーウィニズムを代表させているようにもみえる。そうだとするとその理由は、彼には「生存闘争」は（用語はともかく事柄としては）論証を必要とする学説でなく提示すれば万人が認める客観的事実とみえ、「自然選択」のほうは、それが真理であることをこれから説得すべき学説と思われたからではなかろうか。

ところでダーウィンは自らの学説を、「最適者生存」(survival of the fittest)⁴⁾ という用語でも示している。これは『種の起原』初版ではなく、後の版の修正で導入されたもので、彼に先立つ進化論者の一人、スペンサーから取り入れたものである⁵⁾。私はこの導入は改悪であったと考える。ダーウィニズム批判の際にこの観念はしばしばやり玉に挙げられるもので、控えめに言っても、この観念の論理的有効性はかなり疑問である⁶⁾。以下ではこの語は問題の外におくことにする。

すると問題になるのは、まず「生存闘争」(the struggle for existence)の語である。「ダーウィンにおいては生存闘争の明確な定義が与えられていない」⁷⁾。そしてその最大性の問題性は、それが比喩であるということである⁸⁾。そしてそこから派生して、きわめて広範ないし多義的に用いられるということである。

後の問題性から言おう。今日この語でふつう理解されるのは、同種の個体間の関係についてである⁹⁾。しかしダーウィンは、生物と環境一般との関係についてもこの語を適用している。たとえば、食物を得たり（得られなかったり）風雨などによって滅んだり（滅びなかったり）することにもこの語を当てる。しかし、第一に、これは比喩としても的はずれを含むのではなかろうか。肉食動物が獲物を得るのは「戦い」だとしても、草食動物にとっての草や果実は「敵」にたとえられるべきであろうか。食べられるような草や実を見つけること自体が「たたかい」だというなら、語の意味を広げ過ぎではあるまいか。第二に、これと、同種の個体間の関係の問題とは区別が必要であろう。進化の要因・仕組みにおいて問われるのは後者であって、他の環境との関係性も、それが同種の他の個体との「たたかい」に有利または不利に働くというように間接的にである。よってダーウィンは不用意にこの語を広く用いたと位置づけ、以下はこれを同種の個体間の問題に限定して検討する。

そしてこの場合にも、この語が比喩であるということがまず問題となる。すなわちそれは個体間の直接の戦い (battle) を意味しているのではない。植物はもとより、鮎や鯉同士、犬や猫同士が、殺害に至るような「たたかい」をすることはきわめてまれな例外的状況においてしかない。そうしたことはふつう観察されず、ダーウィンもそうした事態をこの語で意味しているのではない¹⁰⁾。すなわちこの語で意味されている典型的事例は、次のようなものになる。たんぼぼAの種は土に落ちて芽を出したが、たんぼぼBのたねは川に落ちて芽を出せなかった。めだかAは無事成長して自分の子を生む（または生ませる）ことができたが、めだかBは稚魚のとき他の魚に食われてしまった¹¹⁾。こうした事例において、AとBが「闘争」していると言えるであろうか¹²⁾。甲が乙の比喩であるというのは、乙は甲の一種ではないが、ある点で共通であるときである。ダーウィンがこの比喩を用いたのは、彼が「生存」した個体を勝者、しなかった個体を敗者とみたということで、確かにこの点では本来の闘争と重なる。しかし本来の闘争で本質的と考えられるのは、ある当事者が他の当事者を闘争相手とし、自己の優位や他者の支配や排除を目指す目的行為であるということである。非本質的な点での比喩は誤解に導きやすい。ダーウィンはこの比喩を用いないほうが

よかったと考える。

ダーウィンは、同種内の個体間の結果としての「勝者」「敗者」の存在だけでなく、他の生物種や、非有機的な環境条件との、いわば成功失敗の関係性までも「生存闘争」の語を用いた。この不手際は、彼が、「生きることはたたかいである」という、前および非科学的な観念に強く引っ張られていたためではなかろうか¹³⁾。

最後に残るのは「自然選択」(natural selection)の語である¹⁴⁾。ところでこれもまた比喻である。本来の「選択」は目的行為だからである。これを前記のように「勝者」「敗者」に分かれることに当てはめたのであり、これと区別するために本来の選択に「人為選択」という語を造っている。これは「生存闘争」よりはましな比喻で、使わないことを強く勧めはしないが、強いて言えばやはりないほうがよいように考える。目的行為でないというほかに、「選択」という語を使うと選ぶ基準があるように想定されるが、その問題は前述のように開かれたままにしておいたほうがよかったと思われるからである。しかし「生存闘争」だけでなく「自然選択」も使わないなら何と言えよいいのか。比喻を使わず、生物はふつう自分の世代を上回る子を生むが、そのうち「生存」するのは結局は親世代の数とあまり変わらないことが多い、つまり「生物の多産性」でよいのではないか。これは内容上も表現上も何の問題もない。しかしこの表現からは進化の要因や仕組みの問題は見えにくい。それでよいのである。両者は論理的には別問題として理解されなければならない。親世代より多く生まれた子がそれほど「生存」しないという事実に対して「なぜか」と要因・仕組みが問題設定されたとき、同種や多種の生物との、あるいは他の環境要因との関係性の何がどのようにどれだけかかわっているのかが問われてくるのであり、それは現在でもまだ完全な答えは出されていないのである。

進化論やとりわけダーウィニズムについて、それが「共感」とは親和的でない、むしろ対立的なイメージが強いように思われる。それは前者の、「生きることはたたかいだ」という、科学的に実証されたというより学説の背後にある世界観から少なからずきている。その一つの源はダーウィンにもある。

二 『人間の由来』(1871)

この著作の主題は二つある。一つは、人間もまた生物として、進化によって生まれた種であることの裏付けである。進化論が一般社会(特にキリスト教的世界)において最も物議をかもしそうなのは人間の問題であることをわかっていたダーウィンは、『種の起原』では、その問題は最後にごく暗示的にしか触れなかった。実際発刊後そこが争われたが、ダーウィンにかわってハックスリなどが強力に、かつ成功裏に援護をしたので、『人間の由来』では本人も正面からこの主張を、特に比較動物学的観点から行った。しかしこの主題は本稿では扱わない。もう一つの主題、「性選択」(sexual selection)¹⁵⁾について考えたい。

これもダーウィンによる造語であり、「自然選択」との関連でつくられたものである。少なからぬ動物種が、生殖の相手を、同種の異性なら何でもよいのではなく、えりごのみしているという主張である。どの異性からも選ばれなかった個体は子孫を残せない、つまり「生存」できないことに

なる。ダーウィンはこれを、自然選択と並ぶ進化の仕組みの一環ととらえ、『種の起原』のなかでも暗示していたが、この著作でこう命名するとともに本格的に取り扱っている。

ところで、しかしこの問題はその後長い間ほとんど無視されてきた。それは後の生物学者が、彼の主張を誤りと考えてきたからである。ダーウィンの進化論ないしダーウィニズムと言えはすなわち「自然選択説」とされることもいまだに少なくない¹⁶⁾。この無視の原因としては、ダーウィンの段階では実証性が十分でなかったことがあるが、それだけではない。今度の場合の「選択」は比喩ではない。生物個体に「選ぶ」知能や好みを認めている。ダーウィン進化論の大きな功績の一つが目的論の追放であったことは確かである。しかしその後の生物学は非目的論以上に進み、機械論の傾向を強めた。生命現象も物理・化学的現象に基づいて、またその法則が許す範囲内にある。しかしそれに還元されるということは科学的に証明された真理でなく、一つの哲学的立場である。この立場からすれば、知能はともあれ、人間の趣味のような、つまり生存の有利さと無関係の基準で配偶相手を選ぶというような考えは、「擬人的」説明として受け入れがたかったのである¹⁷⁾。しかし「性選択」は見直され、実証的な裏付けも増え、そのような事実があることは今日では確立していると言ってよい。長谷川真理子氏は言う、「雌による選り好みということがまじめに取り上げられ、『雌』が何をしているか、ということが注目されるようになるのは、一九七〇年以降になってからです。いまでは、〔その〕証拠はたくさん集まりましたし、〔その〕研究は、一九八〇年代以降は、最先端の話題の一つとなっています」¹⁸⁾。長谷川氏は、また「選ぶ」側が多く雌であるということが、伝統的な心理的性バイアスから、この学説の冷静な検討から遠ざける働きをしたのではないかと示唆している¹⁸⁾。

論理的に最も問題になるのは、「自然選択」との関係である。形式的には、性選択も自然選択の一部とする考え方も可能である。すなわち個体に配偶相手を選ぶ能力や好みを認めるとしても、それはともに子をつくるため（またはさらに最も「生存」する子をつくるため）に適した相手を選ぶのであるから、自然選択の一部（すなわち配偶相手による選択）であるとするのである。ところが問題は、どうみてもそうは思われなような性選択があることである。それゆえダーウィンもはじめから、自然選択の例外となるような、少なくとも独立した原理として考える必要がある仕組みとして、性選択を位置付けたのである¹⁹⁾。今日の時点で知られている性選択を全体的にみれば、自然選択の一部と考えられるようなもののほうが確かに多い。しかしそうでないものもきわめて特殊な例外的現象とは言えない。そしてその説明についてはいくつかの苦心の学説が出されている。「ハンディキャップ仮説」というのは、それ自体としては生存に不利と思われるような形質を持ちながら繁殖期を迎えた個体は、逆にそれを補って余りあるものを持っていると想定されて選ばれるという、ひねり技の論理である。また「ランナウェイ仮説」というのは、はじめは生存に有利な形質が選ばれるのだが、淘汰を通じてその形質の極端化が進み、ついにははじめの目的を離れた、それ自体の追求に独り歩きしてしまうというものである²⁰⁾。

いずれにしてもここには、生物における「自然選択」からの逸脱がみられる。そしてそれは必ずしも失敗ではなく、発展ないしまさしく進化でもあり得るのではないか。人間の恋愛も、由来からは種族維持の性本能ではあろうが、むしろそこからの逸脱に本質があるのではなからうか。ところで性選択における選ばれる基準となる「標的形質」は、このような逸脱の場合、人間目線で「美しさ」に近いことが興味深い。逆にこのような進化の結果として人間の本源的美感の形成を考えるべ

きなかもしれない。どのような男女が異性に好まれるかは私達の大きな関心事である。その際「生活力ある」男性や「子だくさん」型の女性でなく、見た目のよさや歌²¹⁾や踊りの上手が選ばれたりする。平和ぼけした飽食の現代社会の「退廃」と嘆く保守派もいるかもしれないが、未開部族でも同様な「チャライ」習俗はよくある。保守的な「お見合い」でも、まず「趣味」という、実益から独立した共感可能性が問われる。恋愛を、生殖に向けた遺伝子による脳の操作とする還元主義でも、純粋な魂の交わりとする二元論でもなく、共感をその二極の媒介としてみるのが妥当ではあるまいか²²⁾。

性選択は「擬人的」説明として、むしろまさに「ダーウィニスト」たちによって退けられてきたと述べた。これは目的行動を（仮に人間については認めるとしても）人間以外の動物には認めないとする点で断絶をおくもので、むしろ進化論の趣旨とは逆向きの考え方ではなかろうか。実証の裏付けのない「擬人化」は無論科学的「説明」ではないが、ある種の動物のある種の行動が、人間のそれとの類比や連続性に即しても考察され得ることは認めるべきではなかろうか。機械論や逆の生氣論への性急な還元でなく、ダーウィン自身にはより柔軟な、生物—人間観があるのではなかろうか。

この著作で「共感」関連でのもう一つ大きな論点は「群選択」(group selection、集団選択)の理論である。これについては、なるべく簡単に整理したい。後のいわゆるダーウィニスト達によって、「性選択」が無視されてきたとすれば、群選択は否定されてきた。これも還元主義によるものであり、個体還元主義はさらに遺伝子の「自己保存」に還元されるまでになった。念のために言えば、主義（一種の形而上学）でない還元そのものは必ずしも誤りではない。ハミルトンによる「包括適応度」は重要な理論的成果であり、蜂などの社会性昆虫の「利他」行動は半倍数体の生殖による遺伝子の自己複製から説明される。しかしすべての生物のすべての行動については、これだけではもちろん、個体間の「互惠行動」によっても説明されつくせないということが、冷静に認められるようになってきた。そしてそのことを裏付ける理論仮説としては、強引な還元論にかわり、「選択」が行われる単位として、遺伝子、個体、群、種の各層を認める「マルチレベル選択」説が力を増しつつあるという。そしてダーウィンは群選択でのまさに重要な要因として、「共感」(sympathy)を位置付けている²³⁾。

『種の起原』に関して私は、丁寧に読むならば著者の言わんとするところは「共感」を排除するものではないと述べた。『人間の由来』においては、著者は、性選択と群選択との両方において、共感を積極的に取り込もうとしている。すなわちダーウィン自身のなかに、共感をめぐって二つの方向性が存在する。一つは、前節で私が述べた、「生きることはたたかいである」という前および非科学的な観念である。前ないし非科学的な観念にも二種類あり、一つは主として日常経験による信憑があり、そのなかには天動説のように科学的認識に反するものもある。もう一つは（部分的には日常経験に関係するとしても、主としてむしろ）社会通念として教え込まれる世界観である。広義の形而上学であり、宗教を含む「イデオロギー」における事実解釈の部分も、もっと漠然とした、たとえば男（雄）優位の観念といったものも入れられよう。するとダーウィンにおいて、「共感」を否定するように導くものは形而上学者としての彼であり、「共感」を肯定するように導くのは、科学者としての彼であると言えるのではなかろうか（むろんこれは、性選択や集団選択について彼が考えたすべてが正しいという意味ではないが）。

三 『人及び動物の表情』(1872)

この著作は「共感」とさらに強く関係する。共感とは他者の感情を認知して同じ感情を発現することであり、感情発現の典型が表情だからである。

まず問題になるのは、ダーウィンが他の動物にも「感情」[emotion]を認めることである。これもまた、以後の正統生物学者にふつうのことではなかった。彼を「感情についての最初の近代科学者」とする位置付けるものもある²⁴⁾。「感覚」[sensation]と区別された「感情」は内的なもの、精神的なものと考えられるからである²⁵⁾。ダーウィンはたとえば「赤面」を、恥ずかしさという感情の生理的発現である表情として、「精神的なもの」と認める²⁶⁾。

前節で「目的行動」に関して言ったことがここでも言えよう。すなわち他の動物と人間との連続性を認めるからこそ、前者に感情と表情を認めることを（無論安易な前科学的「擬人化」は排しつつも）すべて「擬人化」として退けるべきではない、ということである。ダーウィン以前では、キリスト教が、そしてこれと結びついたデカルト的物心二元論（動物機械論）が、「動物の心」を否定していた。ダーウィン以後では、「心」そのものを否定するものとして、存在論では機械論的唯物論（人間機械論）、科学方法論としては還元主義、心理学では行動主義がある。心（精神）を物質から独立した「実体」とみなすことは確かに正しくない。しかし存在論的、方法論的、心理学的に「心」を抹殺するというのも（詳論できないが）、一面的な誤りである²⁷⁾。物理的—科学的—生物的精神的な諸現象は、連続性と断絶または質的飛躍の両面において把握されるべきであろう。「動物の心」の問題は、そのなかで生命の領域と精神の領域との連続と飛躍との問題にかかわる。「行動主義」を、それこそが正しいという声が大きかった時期を既に終わったものとする位置から書かれたボックスの『動物心理学史』（1984）は、最初にダーウィンをとりあげているが、そこでの「心」はやはり知能の問題であり、感情の問題はまだ扱われていない²⁸⁾。

さてダーウィンはここでも「共感」について、「愛情」(affection)との関係にも触れつつとりあげている。社会性動物の「喜び」は、したがって単なる感覚的「快」に還元されないものにとらえている。音楽と共感の関係について述べている²⁹⁾ことも、前節で挙げた「歌」と性選択との関係ともつながり、興味深い。

ダーウィンは、動物における表情認知は進化の過程で本能化されたもの³⁰⁾と考える。誕生した個体にとっては、その大部分は学習によるのでない生得的なものであるという点では、これはもっともであろう。彼はまた、異なる人種や民族の調査から、人間においても、基本的な表情認知は共通するものであり、したがって文化的な約束事以前であるとみなす。これは人間の感情はしたがって共感には生物学的基礎があることの裏付けと言ってよいであろう。

四 結び

共感論の観点からみて、ダーウィンは多くの興味深い考察や示唆を与えている。むしろその後のいわゆる「ダーウィニズム」が、不当に無視したり否定したりしたものもある。共感の生物学的な

考察は、もちろん事柄そのものの研究が主軸となるべきであるが、ダーウィンを読み、あるいは読み直すことにも、手掛かりがあるというのが本稿の結論である。

【注】

- 1) 進化論は古代からあるので、ダーウィンはその「提唱」者として重要なのではない。しかし今日進化論と言えばダーウィンとなったのは、単なる可能な学説としてでなく、科学的に正しい学説として進化論を認めさせたからであり、この意味で私は彼の最大の功績を進化論の「確立」という。そしてこれは、ダーウィニズムの提唱は、少なくとも彼の最大の功績とはしないという私の見解とも結びついている。
- 2) 周知のように、宗教上の立場から進化論をいまだに「認めない」人々はいる。進化論が科学的真理と認められる諸根拠は、ウィキペディアにも中学生用参考書（たとえば左巻健男『新しい科学の教科書』Ⅲ第六章第一節1「進化の証拠」、文一総合出版、2004）にもみられるので本稿では略す。
- 3) 進化論の妥当性は、進化の要因や仕組みについて未解明・未解決な点があることと相対的に独立して説明できる。いわんや進化論の現在の時点での「弱点」が、特殊創造説や神のデザイン論の正しさや優位性さえ導くものではない。しかし今日でもこうした弱点を進化論自体の「誤り」の論拠に用いる宗教家などはいる。
- 4) 「適者生存」という訳語のほうが一般的だが、本稿では直訳しておく。
- 5) Ch. Darwin, *The Origin of Species*, The American Library of World, 1958, p.74. なお「進化」「evolution」の語も第6版ではじめて現れスペンサーのほうが早い。ただし借用とは言えないようである。（八杉龍一「進化概念の成立について」『理想』1983年8月号、理想社、9頁、13頁。）
- 6) この用語は、最適の個体が生存する、少なくともより生存しやすい、という判断を意味するものと考えられる。生物学的に、「生存した」のは子を生んだ個体として定義されるが、「適した」とはどういうことかを独立に定義することは難しい。結局のところ、子を生めたような個体が適した個体だということに帰着しがちであり、それなら生存する個体が生存する、という無内容な同義反復になる、というのがよくある批判である。
- 7) 八杉龍一『ダーウィンを読む』岩波セミナーブックス、1989、91頁。この著者は、これが同語反復であるという批判を、「適者生存」というスペンサー由来の語が「いっそう強めるものになっている」（同書、93頁）と指摘する。
- 8) 「私は生存闘争という用語を、ある生物が他の生物に依存するということや、個体が生きて行くことだけでなく子孫を残すことに成功することを含ませ、広義にまた比喩的に用いる」（Darwin, *op.cit.*, pp.74-75.）
- 9) すなわち他の種の生物との「食物連鎖」は別問題である。「弱肉強食」という非専門用語によって両者が区別されずに意味されることがあるので、念のため断っておきたい。
- 10) 同種の個体同士が、（偶発的または結果的ではなくて）殺害をめざす「戦い」を行うのは、蟻や人間など、生物全体からはかなり少数の種にしか認められない。性悪説の哲学者が「人間は人間にとって狼である」と言ったが、狼は羊を襲っても狼同士で戦争はしない。ある種の動物はなわばりや（餌や異性を得る）優位をめぐる争いが、多くはその点で決着をみると戦いは終わって共存する。類人猿における「仲直りの儀式」なども注目されてきた。
- 11) 内容上の議論に一言だけ触れれば、こうした事例でAが「生存」した要因はそれが「最適」だったからでなく「幸運」だったから、つまり偶然としたほうが妥当であろうという意見が生じる。
- 12) わが国ではしばしば「生存競争」という語が用いられるのは、この点でダーウィニズムをより受け入れやすくする効果があうが、ダーウィン本人の思考をまず検討したい本稿では直訳の「生存闘争」で通す。
- 13) 八杉氏は、ダーウィニズムにはむしろ「競争」(competition)「の語を用いるほうが紛らわしくなく、ダーウィン自身もときにはときにこの語を使っているわけである。だが、あくまでも生存闘争を主概念にしているの

- は〔…〕それが彼の自然観、ことに生物界への見方を、代表するためであると考えられる」（前掲書、110-111頁）と述べている。なお前注参照。
- 14) 従来は「自然淘汰」の訳語がふつうであったが、この変化の理由はたぶん単に「淘汰」の字と語が難しいためであろう。しかし近年敢えて「淘汰」に戻す専門家がいる。「自然選択」万能論が弱まってきて、それは突然変異によって生じた生物が生存に不利であって滅びるという消極面に主として働く仕組みと考えのがよいので、日本語としては「淘汰」のほうが適するという理由である。一考に値しよう。
- 15) 「性淘汰」「雌雄選択」という訳もある。
- 16) 仮に性選択理論が誤りであつても、正しい、あるいは正しいと後の人々が考える説だけをその人の主張のよみにみなさせるのは、科学的には好ましくない。
- 17) この種の還元主義の極端な人たちでは、生物機械論から人間機械論に進み、人間の自由意志を否定して、すべては生物としての（あるいは「遺伝子」の）「生存」のための仕組みとして説明を図る。
- 18) 長谷川真理子『クジャクの雄はなぜ美しい?』紀伊國屋書店、1992、23頁。彼女によれば、雌の選り好みは最初に実証されたのは1981年で、ダーウィンも挙げたコクホウジャクによってであるという。（ダーウィン『人間の由来』（下）長谷川真理子訳、講談社学術文庫、2016、197頁（訳注）。）
- 19) たとえば雄の鹿の角の大きさの例を挙げる。Ch. Darwin, *The Descent of Man*, Penguin Classics, 2004, pp.262-263. 羽手な色彩や大きな鳴き声などは、外敵に対するリスクを伴う。また「ディスプレイ」と呼ばれる、実利をもたらさそうにない踊りなども知られている。
- 20) 長谷川真理子氏は、ダーウィンの先の角の例に関して「このあたりの議論は、現在の進化生態学で考察されている、ハンディキャップやランナウェイの議論を髣髴させる」（『人間の由来』（上）、2016、403頁（訳注））と指摘する。
- 21) 鳥の「歌」が、（なわばり指示や警戒音などもあるが）求婚（つまり性選択）において重要な意味を持つとし、さらにそれを人間の言語にもつなげてみようとする生物学的研究として、岡ノ谷一夫『「つながり」の進化生物学』朝日出版社、2013、参照。
- 22) この観点をとる哲学者はヒュームである（拙著『共感の思想史』創風社、2006、140頁、参照）。それ以前も以後も、この常識と重なる線での理論の展開は、専門的思想家ではあまり見られない。生物学的本能への卑俗な還元になるか、高尚過ぎる精神主義かになりがちである。
- 23) ダーウィンは、「最も共感的な個体を最も多く持つ集団が最も栄え、より多くのこどもをあとに残したに違いない」（Darwin, *op.cit.*, p.130.）と言う。なお拙著『共感を考える』創風社、2015、第三部第一章第二節、参照。「共感」をめぐる、ダーウィンとJ.S. ミルの関係についてはこの拙著でも触れたが、彼とアダム・スミスとのより微妙な関係については、下記を参照、D.M. Levy & S.J. Peart, *Sympathy caught between Darwin and eugenics*, in: *Sympathy*, Ed. by E Schliesser, Oxford Uni.Press, 2015, p.325.
- 24) B. Rosenwein, *What is the History of Emotions*, Polity Press, Cambridge, 2018, p.12.
- 25) ダーウィンは既にスペンサーが、「私達の身体組織によって発生する」「感覚」(sensation) から「感情」(emotion) を区別したことに注意している。Ch. Darwin, *The Expression of the Emotions in Man and Animals*, The University of Chicago Press, 1965, p.27.
- 26) *Ibid.*, p.309-310.
- 27) グリフィン『動物に心があるか——心的体験の進化的連続性——』岩波現代選書、1979、では「行動主義的反論」「擬人論的反論」への批判的考察がある（第V章）。
- 28) ボークス『動物心理学史』誠信書房、1990。
- 29) Darwin, *op.cit.*, p.84.

Reading Darwin in terms of the Sympathy-Problems

NAKAJIMA, Yoichi

Charles Darwin (1809-82) is, needless to say, a great British biologist who convinced at least the world of sciences the biological evolution. I take up three books from his works to examine them in terms of the problems regarding sympathy.

The main theme of his famous *The Origin of Species* is the mechanism rather than the proofs of evolution. <The survival of the fittest>, term indiscreetly borrowed from Herbert Spencer, seems to fall short for the explanation. Darwin's own phrases <the struggle for existence> and <natural selection> tend to exaggerate the hostilities in nature beyond their proper meanings as metaphors. This poor terminology has kept biology away from the problems of sympathy for a century.

In his *The Descent of Man*, Darwin brought up sexual selection as not included in natural selection. He also advocated the group selection. These two selections, ignored or rejected and reevaluated just in recent years, have a great deal to do with love and sympathy.

In his *The Expression of Emotions in Man and Animals* Darwin accepted <emotions> in some other animals. It leads to a study of the biological base of sentiments and sympathy.

Reading Darwin, we discover that Darwin himself is more open-minded to sympathy, love or cooperative behavior in animals than many so-called Darwinists after Darwin who reduce the whole life to the mechanical and egoistic survival-reproduction system.